



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第9回】

南北朝時代、「北朝の雄」となる

南朝の拠点・瓜連城

茨城県北部を通る国道118号を水戸市方面から常陸大宮市方面へ向かう。那珂市瓜連地内の「静入口」交差点を右折し、JR水郡線の踏切を渡る。右に素鷲神社の森を見て、瓜連宿を通る旧国道と交わる「北瓜連」交差点を直進し、常陸太田市方面に進む。間もなく道路左手に立派な楼門が現れる。浄土宗常陸総本山、「常福寺」である。楼門の脇に「史跡 瓜連城址」と刻まれた石碑が建つ。常福寺が城跡に建っていることを示すあかしである。

常福寺の本堂と宝物殿の間を歩いて杉林を抜けると、ここがかつて城址だったことを示す遺構が現れる。急斜面の下部を平坦地とした出丸のような遺構も見受けられる。土塁の痕跡は東北崖下に長く伸びている。『常福寺縁起』は瓜連城址の規模について「現在の瓜連宿全部が城郭内にあり、本丸は常福寺本堂の位置にあったと思われ、二の丸、三の丸をもった相当大規模な城郭であった」と推測している。

瓜連城址は昭和9年(1934)12月、那珂西城(城里町)、真壁城址(桜川市)と共に県指定史跡の指定を受けた。これらの指定に先だって同年5月に関城址(筑西市)と大宝城址(下妻市)が国の史跡指定を受けている。翌昭和10年6月には小田城(つくば市)が国指定史跡となった。これらの城址には共通項がある。それは日本が南朝、北朝に分かれて戦っていた時代に一時的であれ、南朝側の城だったことである。

「常陸介」の家格回復

鎌倉に屋敷をもっていた佐竹氏は、5代義重以降、「承久の乱」で失地回復したとみられる奥七郡(茨城県北部)の一部である「酒出」、「額田」、「増井」を拠点に在国活動に入った。その

活動目的は、奥七郡内の支配地域拡大に他ならない。『佐竹家譜』は6代長義が「放生会参宮随兵辞退の請文を献ず。当時、長義在国、所勞に因て灸治を加ふと雖ども未だ本復せずと云々」と書いている。

注目される点は「当時、長義在国」という記述である。佐竹氏当主の長義は、この時、奥七郡内にいたということである。いったいどこに居城していたのか。『常陸大宮市史』(資料編古代・中世)に鎌倉時代の公卿、葉室定嗣の日記『葉黄記』の宝治元年(1247)7月24日条に「中宮御産雑事定文」(写)が載っている。そこに「侍所 卅膳 義重」とある。侍所の三十膳を常陸介佐竹義重が負担した、ということである。

これを踏まえ『同市史』は「義重は承久の乱を経て有力御家人にふさわしい受領としての家格を回復していた」と解釈。常陸国は親王任国なので国司の最高位の「守」は親王が就く。2番手の「介」が任国(常陸国)の事実上の行政責任者である。『寛政重修諸家譜』は義重同様、6代長義、7代義胤、8代行義と歴代当主の注書きに「常陸介」の官職を記載している。「常陸介」の家格を考えると、佐竹氏は旧領・奥七郡を少しずつ回復していた可能性が考えられる。

北条氏の奥七郡進出

こうしたなか鎌倉では、幕府を支えてきた有力御家人が次々と倒れていった。宝治元年(1247)、執権北条時頼は安達景盛と組んで三浦泰村を滅ぼした。弘安8年(1285)には北条氏嫡流家の得宗家執事、平頼綱が安達泰盛を襲撃、滅亡させた。前者を「宝治合戦」、後者を「霜月騒動」と呼ぶ。この2つの合戦などを通して北条氏得宗家は、専制体制を確立、各地で地頭職や所領を大幅に増やした。

「鎌倉時代の常陸国における北条氏所領の研究」(『茨城県史研究』第15号)を著した石井進氏は、鎌倉幕府滅亡時の元弘3年(1334)当事、北条氏一族が領有していた所領(田積)は常陸国内の総田数の「22.7%」にあたりとし、「これは相当の高率であり、得宗専制期の北条氏勢力を支えた経済的基盤の大きさを如実に物語る数字といふべきであろう」と指摘している。

また、石井氏の上記論文によると、奥七郡でも那珂東郡(水戸市的那珂川以北地域)、多賀郡大窪郷の一部(日立市)、佐都東郡の東岡田郷(常陸太田市)、瓜連(那珂市)の4地域は北条氏一族の所領となっていた。このうち瓜連は久慈西郡に属するので、奥七郡のうち4郡が北条氏一族の支配地、もしくは影響圏にあったことになる。しかも、これらの地域は瓜連に代表されるように陸奥国へ至る交通の要所にあたっていた。

鎌倉幕府滅亡と建武新政

北条氏得宗家の専制支配は在地武士の反発を招き、元弘3年(1333)、幕府の有力御家人であった足利尊氏が丹波(京都府)で挙兵、六波羅探題を攻め落した。新田義貞は鎌倉に攻め入り、執権北条高時を自滅に追い込んだ。後醍醐天皇による新政(建武の新政)が始まったが、公家厚遇政治に足利尊氏が反発。以後、国内は後醍醐天皇の南朝側と足利尊氏の北朝側による内乱に陥った。

佐竹氏は同じ源氏の出である足利尊氏と弟の足利直義に加勢。南朝側の北畠顕家、新田義貞が西進して関西に攻めてきた時、尊氏は佐竹氏9代貞義の嫡男、10代義篤を帰国させ、常陸国の守りを固めるよう命じた(『佐竹家譜』)。延元元年(1336)2月のことである。一方、貞義の七男師義は尊氏が九州に落ち延びた際、行動を共にした。

鎌倉幕府滅亡に伴い奥七郡内の北条氏所領は、那珂東郡が足利直義、佐都東郡東岡田郷は京都・臨川寺(寄附)に後醍醐天皇から与えられた。瓜連は同天皇側近、楠木正成領になったとみられる。『瓜連町史』は「楠木左近蔵人正家が楠木正成の代官として常陸にあらわれる」時期を「延元元年正月から2月頃」と推定。以後、「正家は拠点で瓜連と定め、これより佐竹の軍勢と戦うことになる」(『同町史』)と述べている。

北朝の雄として活躍

瓜連城の戦いは、常陸国における南北朝時代を象徴する出来事だった。攻防戦は延元元年2月から始まり、12月の落城まで1年近く続いた。南朝側は楠木正家の他、北畠顕家家臣の広橋経泰、常陸国内の武将、小田治久(高知)、那珂通辰ら。北朝側は佐竹貞義と嫡男義篤と一族。それに陸奥国の武将、伊賀盛光ら。3度目の決戦で正家らが籠る瓜連城は落城。この後、佐竹氏や高師冬らの北朝側は、南朝側の小田城、関城、大宝城等を次々に攻略していった。

常陸国で歴史に残る合戦場となった地域は鎌倉時代、北条氏の所領だったところが多い。瓜連城はその典型ともいえる。石井進氏は先の論文で「常陸国が関東地方における南軍の最有力な拠点」となった点について「一つの考え方は旧北条氏一族領が建武政府によって没収され、南軍諸将の所領とされたため」と指摘。併せて「反北条氏勢力」の存在も無視できない旨を触れている。

佐竹氏9代貞義は南北朝時代、北朝の雄として歴史に登場した。一連の戦いで貞義は5男義直、6男義冬を亡くした。一族を含め多大な犠牲を払い念願の奥七郡を手中に収めた。旧領を取り戻しただけでなく、奥七郡を越えて勢力圏を拡大する機会が到来した、といえる。南北朝時代を乗り切った佐竹氏は、これ以降、足利尊氏が開いた室町幕府の下で新たな歩みを始めることになる。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



今も当時の堀跡を残す瓜連城址
＝那珂市瓜連